

---

ghschool Of The Dead ~ Resistance to death ~

ダン・ボール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H i g h s c h o o l   O f   T h e   D e a d   〈 R e s i s  
t a n c e   t o   d e a t h 〉

### 【Nコード】

N 5 0 3 4 M

### 【作者名】

ダン・ボール

### 【あらすじ】

ありふれた朝、何時も通りの生活が続くのだと思っていた。その日、ある少年は学校に行かず町に歩いていた。しかし不運にも狂気の惨劇に遭遇する。伝染する狂気、襲い掛かる死者。そこで少年は疾走する。狂った世界でイキノコルタメニ・・・。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、ダン・ボールです。

この小説が初投稿となりますので、生暖かく見守っていただき、アドバイスなど貰えると嬉しいです。

不定期ではありますが完結を目指してがんばろうと思います。  
よろしくお願いします。

## プロローグ

ジリリリリリリ

開いている窓から眩しい日差しと少し肌寒い空気が入り込み、雲一つなくまさに晴天と言っていい空模様である。

そんな素晴らしい天気の中、ある家の一室にベッドで熟睡する少年がいた。

睡眠を謳歌しているのがわかる安らかな寝顔をしていた少年であったが、鳴り響く目覚まし時計の騒音により、その寝顔は少々不快感の色を示していた。

ジリリリリリリ

「・・・・・・・・」

ジリリリリ「ん」・・・朝か・・・・・・・・」ガチャ・・・

目覚まし時計に手を叩きつけて騒音を止め、少年がムクリと上半身裸で身を起こし、立ち上がる。

180近い身長に筋肉質でありながら引き締まった体をし、整った顔立ちをしているため女性にもてそうではあるが、寝癖によってボサボサの染色した金髪や寝起きのけだるい雰囲気からはまったく感じ取れない。

少年が立ち上がり寝ぼけた目で外を見ると学校に登校している学生や出勤中の会社員の姿が目に入る。

本来ならば学生であるこの少年も学校に登校していなければならぬ時間なのだが、少年にとっては学校など卒業できればどうでもいいので気にしていないのだ。

少年は制服に着替えながら時間割を見て、

「今日は5限に女子の体育があるのか・・・、じゃ午後に学校に行くとしてそれまで町でも見て回ってるか」

と予定を決めている間に着替えを終え、鏡の前で寝癖ではねた髪を整える。

そして簡単な朝食を作り食べ終えて後片付けをし、足早に家を出る。玄関を出て一歩外に足を踏み出しただけで日差しが少年に容赦なく照りつけ、新鮮な風が鼻腔をくすぐる。

少年は目を細め、

「今日もいい一日になりそうだ」

そう呟き、歩き始める。

それが獅子堂うしどう 純じゅんの最後に感じた平穏な朝となった・・・

## 日常（前書き）

しばらく原作の登場人物はでませんがご了承を（><）

## 日常

この町、床主市は100万人都市であり、空港や港を持ちほどほどに栄えた町である。商店街に行けば流行のファッションに身を包んだ若者たちが町をうろつき、老人たちは笑顔で知人と話をしつつ面白い物を楽しんでいる光景を見られる。

家を出た淳は現在メインストリートからそれた薄暗い裏路地を歩いていた。

そこには所謂不良と呼ばれる者たちが集まる一画があり、そこにいる自称町一番の情報屋を探しているのだ。

その人物は自称しているだけはあって町の表から裏までの情報を持つており、情報をむやみに漏らすこともないのでその道では信頼されている人物である。味方も多いが敵も多いため、あまり姿をみせないことが難点ではあった。

小1時間ほど目的の人物を探していたが見つからず、裏路地から出ようとした淳は後ろから肩を叩かれ驚きながらも即座に振り返る。するとそこには軽薄そうな雰囲気をもし出す男が笑顔で立っていた。

「よお、レオじゃねえか！？久しぶりだな！」

「久しぶり、っても半月ぶりくらいだろ……。それとその名前で呼ぶな、かつこ悪い……」

「ええ、そうか？俺はカツコイイと思うけどな。喧嘩の時に暴れるように見える髪型に獅子堂って苗字、まさにヤンル帝じゃん」

「・・・勝手にしろ。で、本題だが何か面白い情報は仕入れてるのか？」

「ん、面白そうなねえ・・・。2つほど有るには有るんだけどね・・・ニヤニヤ」

「・・・その気色悪い表情はやめろ、吐き気がする」

淳はひどい、と裏声で叫ぶ男に向けて万札をさしだす。

「まいどあり、情報だけど1つ目は繁華街の裏にあるミリタリーショップのおちゃんがレオのことを呼んでるって事。なんか、かなりヤバイものを手に入れたらしいぜ。で2つ目は最近この町近辺で自衛隊が活動してる事だ」

「自衛隊？この町の近辺には演習場なんてないだろ？」

「ああ・・・。しかもかなりの頻度で活動してるぜ。遠目で観察したがありや完全武装してたぞ」

「近々何かが起こるってことか・・・」

「こっちは新しい情報を仕入れてるから何かあったら連絡するぜ・・・。ま、高くつくだろうけどな」

「ハッ、言っとけ・・・。危ない橋を渡るのもいいが気をつけろよ・・・」

「これが噂のツンデレか」



「・・・死んどけ、糞野郎が・・・」

情報屋に背を向けた淳は繁華街に足向け、足早に歩き始めた。

情報屋と別れた淳は新たな目的地である繁華街のミリタリーショップの前にいた。

自動ドアをくぐると店内にはカウンターの上で銃を解体しつつ奇声をあげる変態がいた。

その姿を見た淳は踵を返し店を出ようとする。が、変態にまわり込まれてしまった。

「ようやく来よったのに顔を見てすぐ帰ることはないじゃろが、キヒヒ」

「ちっ、来てやったぞ、じじい。何のようだ・・・？つまらなければすぐさま帰らしてもらっぞ」

「せっかちじゃのう。ホレ、これを見てみい」

おもむろに渡されたものはデザートイーグル。

「ん、これは・・・・・・実銃！？じじい、これをどこで！？」

「驚いたじゃろ。それは輸入品じゃよ、キヒヒ」

「今までも変態ではあると思っていたが、ついに実銃にまで手を出すとは・・・。見つかったら確実に捕まるぞ」

「フオッフオッフオツ、見つからなければいいんじゃないよ」

「・・・」

「ほかにもいろいろと仕入れたのじゃがそれは後で見せるとして・・・。今日の本題は別にあるんじゃない。以前お主から頼まれていた銃が完成したので呼び出したのじゃよ」

「本当か!？」

じじい（変態）が店の奥に行き、しばらくして持ってきたのが先ほどと同じデザートイーグル。ちなみにガスガンである。

「うむ。少々改造中に魔が差してしまったが問題なかるう。」

「・・・」

「全体的にパーツ交換をして従来よりも耐久性を高め、高圧ガスに取替えて6mm金属弾を撃てるようにし殺傷能力を高め、その頭をぶち抜いていいか・・・？」ま、待て。それはワシの傑作と言ってm「おれは注文したときに『普通』の改造ガスガンと言った筈だが」すまぬ、調子にのりすぎたのう」

「はぁ・・・もろ違法だろうが」

「お詫びとして弾とこのベレッタをつけよう。こちらは違法改造しておらんぞ」

「・・・ったく、しょうがねえな」

2丁の銃とBB弾と金属弾を受け取りバックに入れ、店の自動ドアをくぐる。

普段から持ち歩いている機械式の懐中時計を見ると正午になろうとしている。

「予想外に時間をくっちゃまったな。学校に急ぐか」

## 逃走

「・・・・・・・・ツハツハツ・・・・！」

今、俺は繁華街の路地を走っている。全力でだ。

息が苦しい。動悸が激しく心臓が破裂してしまいそうだ。

できれば一息つきたいところだが、後方には人間だったモノが複数蠢いている。それに対する恐怖が足を突き動かす。

何故、俺は走っている・・・・？何から逃げている・・・・？何が起った・・・・？

わからないわからないわからないワカラナイワカラナイワカラナイ・・・・

こんな時こそ思考を停止させてはならないと思うが、頭に靄がかかったように考えがまとまらない。

約30分前――

何時も通りに学校へ向かう途中、妙な騒がしさを感じ通りに寄り道をした。ちょっとした好奇心だったんだ。

しかし、通りを覗いてみると、そこには信じられない光景がひろがっていた。

ありえない方向に骨が曲がり、腹から腸をはみだした死体が動き、人を襲っていたのだ。

しかも襲われた人間はすぐさま大量出血し、人間だったモノの仲間入りをはたしてしまっている。

まさにチープな三流ホラー映画にでもあるような展開に、俺は笑いが込み上げると同時に嘔吐感を催し、胃の中身を吐き出した。

しばらく胃液が出るまで吐き続けたが、ヤツらの足取りが近寄ってくる気配を感じ、俺はその場から逃走した。

――

迷宮のような思考から現実に意識を戻すと前方に人間だったモノが見える。深く思考に潜りすぎて気づくの遅れた――！

距離は約50m。運悪く左右に通り返ける道はなく、後方はより多くのモノが蠢いている。横を走り抜けようにも数が多すぎて無理そうだ。

逃げ道のない絶望的な状況。

「俺、死ぬのか・・・？」

ふと口から言葉を呟いた瞬間、恐怖が体を突き抜ける。のどが渇く。冷や汗が止まらない。

呆然と立ち尽くしていたが、膝を地面につき、その衝撃で逃げる間も離さなかったバックが放り出される。

絶望感に押しつぶされそうになったが、ぶちまけられたバックの中身を見、その中に鈍い輝きを放つ物を見つけ我に返る。

改造されたデザートイーグル。それを手に取り、立ち上がる。

ずっしりとした重みと金属特有の冷たさが、俺に告げる。

これは現実なんだと・・・

殺す覚悟はあるのかと・・・

殺される覚悟はあるのかと・・・

「上等だ・・・！！」

叫び、俺は銃を持ち、前方に駆け出す。

死から逃げ出すために。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5034m/>

---

Highschool Of The Dead ~ Resistance to death ~

2010年10月10日11時45分発行